慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『サンド = フロベール往復書簡』をめぐって： フロベール宛「未投函書簡」考
Sub Title	Autour de la Correspondance entre G. Sand et G. Flaubert : Réflexion sur une lettre jamais parvenue à Flaubert
Author	西尾, 治子(Nishio, Haruko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.56 (2013. 3) ,p.29- 54
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20130329-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『サンド = フロベール往復書簡』をめぐって
――フロベール宛「未投函書簡」考――

西　尾　治　子

ジョルジュ・サンドとギュスターヴ・フロベールは、作品に対する創作姿勢、文体、また歴史・政治・社会観や芸術観、人生の対峙法においても対極にあったことが知られている。それにも関わらず、ほぼ15年もの長きにわたり、二人の作家は手紙という通信媒体を介し、人間的な交流を深めた[1)]。

1）サンドが生涯の間に書いたおよそ二万通の手紙は、ジョルジュ・リュバン編纂のサンド書簡集全25巻（ガルニエ版）およびティエリ・ボダンの補遂版に収録されている。フロベール宛の書簡は、そのうちの第17巻（1862–1863）および24巻（1866–1868）に収録されている。サンドとフロベールの往復書簡に関する先行研究としては、以下を参照した。Alphonse Jacobs, *Gustave Flaubert-George Sand Correspondance*, Flammarion, 1981. Monica Kallel, *Flaubert et George Sand Le roman d'une correspondance*, Presses Universitaire de Provence, Aix-Marseille, 2012. サンドの書簡に注目した研究としてはおもに次を参照：Nicole Mozet, George Sand, *Une Correspondance*, Christian Pirot, Paris, 1994, Françoise Van Rossum-Guyon, « La correspondance comme labolatoire de l'écriture, George Sand (1831–1832) », *Revue des Sciences Humaines* no 221, 1991, pp. 87–104. Isabelle Hoog Naginski, « George Sand : ni maîtres, ni disciples» in *Romantisme* no. 122 (2003–2004) pp. 43–53. Martine Reid, «Trouvadoureries», Naomi Schor, « Il et Elle : Nohant et Croisset, *George Sand Une Correspondance*, textes réunis par Nicole Mozet Christian Pirot, 1994, pp. 254–268, pp. 269–282. Janet Beizer, «Sand»s parrot» dans *Women Seeking Expression : France 1789–1914*, Rosemary Lloyd et Brian Nelson (éd.), *Monash Romance Studies, vol. 6*, 200. また、フロベール側の書簡研究では以下が参考となる。Jean Bruno, « Autour

400 通を超える往復書簡には、互いに仕事の進捗を慮り、健康を気遣う熱い友情が刻印されている[2)]。時には激しく自分の立場を強く主張することはあっても、励まし慰め合い、助言を惜しまず、双方の故郷を訪れ、友情を暖め続けた。固定観念に囚われない自由な芸術家として作家を生きる二人は、手紙の末尾に「愛する aimer」という言葉を臆することなく記した。この異例の結びつきの理由はどこに在ったのか。往復書簡という文学的な場は二人の作家にとってどのように機能したのだろうか。往復書簡には、その行間にこれまで説明されてこなかった不可視の何か――二人の作家が理想とするある倫理観に近いもの――が感知される。

本稿では、まず最初に、サンドが自ら長い文面を認めながら、フロベールには届くことのなかった手紙について考察する。この手紙はサンドとフロベールが好んだプラトン思想に言及していること、また二人の作家の書簡上の微妙な人間関係を示唆している点で重要性をもつと考えられるからである。次いで 19 世紀という時代に女性作家であることのサンドの苦悩およびフロベールのジェンダー観の変遷を追究する。さらに二人がプラトン哲学の信奉者であったことに着目し、プラトンの「人間球体論」がサンドの『ある夢想者の物語』にどのような影響を与えたかを吟味する。最後にこれらの考察を

---

du style épistolaire de Flaubert », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, juillet-octbre 1981, Claudine Gothot Merche, « Sur le renouvellement des études de correspondances littéraires : l'exemple de Flaubert », *Romantisme*, no 72, 1991. Michel Martinez, *Flaubert, le sphinx et la chimère*, Paris, l'Harmatan, 2002. Martine Reid, *Flaubert correspondant*, Paris, Sedes, 1995. Amélie Schweiger, "Les lettres de Flaubert ou la littérature en question," thèse du Doctorat, Paris VIII, 1987.

2)『サンド = フロベール往復書簡』の訳者、持田明子によれば、書簡数はフロベールの側から 219 通、サンドからは 204 通を数える（藤原書店 、1998、p. 389）。しかし、筆者の調べでは持田訳の書簡集には、ジョルジュ・リューバンの書簡集（ガルニエ版）に収録されている 1866 年 11 月 29 日付の手紙をはじめとするサンドの未投函書簡が欠落している。恐らく往復書簡ではないという理由によるものと思われる。したがって、これらの書簡を数えるなら、サンドとフロベールの書簡の総数は確実に 423 通を超えると推測される。

もとに二人の作家が文学上のいかなる問題で対立し、しかしながらいかにして互いに歩み寄り、和解と融和に至ったのか、その過程を考察してみたい。

Ⅰ．投函されなかったサンドの手紙：サンドからフロベールへ

本稿で最初に問題とするサンドが投函しなかった手紙とは、パリ郊外のパレゾーからサンドがフロベール宛てに書いた 1866 年 11 月 29 日付の書簡である。この手紙には、次の三点の特徴が認められる。第一にフロベールがこの手紙を読んでいないことである。のちにサンドが述べているように、当時は郵便物の掠奪のせいでしばしば紛失する手紙もあった[3)]。しかし、ジョルジュ・リューバンはこの手紙はフロベールの手には渡らず、サンドの書斎の文具入れにしまわれたままであったと記している[4)]。サンドは何らかの理由により、この手紙を投函しなかったのである。では、なぜサンドはこの手紙をフロベールが読むことを望まなかったのだろうか。この問題は手紙の第二の特徴と関連があると推測される。問題の手紙でサンドはプラトン哲学の肉体と魂の問題に触れ、自分は確信がないが肉体と魂の関連性を把握していたのはプラトンではないかと「私は間違っているでしょうか、私の先生 Ai-je tort, mon maître ?」とフロベールに問いかけているのである。該当箇所を引用してみよう。

> 私は理論は持っていません。私は問題提起をし、問題がある方向で、あるいは違う方向で解決されるのを耳にして人生を過ごしているのです。問題の解答には赫々たる結論もなく、即答も私に与えられることは決し

3）「手紙が掠奪されています。あちこちから手紙が届かないと言って非難されています。」とサンドは記している（1868 年 9 月 10 日付のフロベールへの手紙）。また、サンドのユゴー宛ての『レミゼラブル』の感想を書いた手紙が届いていなかったことを知り、サンドが驚愕したこともあった。Cf. Lettre de George Sand adressée à Paul Meurice, Nohant le 13 (?) septembre, 1862. George Sand, *Correspondance*, t. XVII, Garnier, 1983. p. 229.

4）George Sand, *Correspondance*. t. XX, ジョルジュ・リュバンの注 2、Garnier, 1985, p. 205.

てないのですが。私は自分の知力や別の生がもたらす新たな状態での解明を待っているのです。というのは、この別の世界では思慮深い人々は最終的な結果が出るまで賛否両論の限界を見透しているからです。この関係性を問題にし、把握していると考えていたのはプラトン氏だと思います。（…）確かにこの関係性は存在するのです。宇宙を構成している賛否両論がお互いを破壊し合うこともなく、宇宙は存在し続けているのですから。物質優先主義の人はこれをどのように呼ぶのでしたか。言うまでもありませんが、均衡です。それでは思考優先主義の人は、どうなのでしょう？　やはり均衡と表現するでしょう。私は間違っているでしょうか、先生？[5]（下線筆者）

この一節からサンドが非常に抽象的で難解な問題に取り組んでいる様子が窺われる。19 世紀は肉体と精神、身体と魂の関係に関する激しい議論とともに始まったと言われるが、ここで問題となっているのはこの肉体と精神に関するテーマについてである。サンドはフロベールが大読書家であらゆる書物を読んでいることを知っていた。思わず「私の先生」という表現を使ってフロベールに問いかけをしてしまった原因の一つは、プラトン哲学に関する知識の欠如を恥じたからではないかと推測されるのである。

サンドは自分より作家経験の浅い年下のフロベールに対し、「先生 Mon Maître」という尊敬する呼称表現を使っているが、「私の先生」という呼称はサンドの書簡には滅多に登場しない表現である。15 年近くに及ぶ二人の往復書簡において「先生」と呼びかけているのは、一貫して 17 歳年下のフロベールの方であって、筆者の調べでは、400 通余のサンドの手紙の中でこの手紙以外にサンドがこの呼称をフロベールに使用している形跡がないのである。

では、サンドは「先生」という呼称を他の作家には使用しているのだろうか。『サンドとユゴーの書簡集』を編纂したサンド研究家のダニエル・バヤ

5）サンドからフロベールへ。投函されなかった手紙。1866 年 1 月 28 日。下線筆者。

ウイは、サンドが自分より二歳年長のヴィクトル・ユゴーを「師匠 maître」と呼んだ最初の手紙について言及し、サンドはその後もこの呼称をユゴー宛の手紙で何度か使い、『レミゼラブル』の著者に対し深い尊敬と忠誠心を示していたと指摘している[6)]。

このことからサンドはユゴーとは異なる態度でフロベールに接していたことが理解される[7)]。注目すべきは、投函されなかった手紙の書かれた時期がちょうど二人の書簡上での人間関係が決定しようとする微妙な時期と重なっていたことである。文通相手とどのような人間関係を構築するかは二人の作家にとって大切な問題であった。いかにして二人はこの問題を解決したのかを検証するために、おもに呼称や親しさを表す表現に着目し、その経緯を辿ってみたい。

サンドがフロベールに初めて手紙を認めたのは、1863 年 1 月 28 日のことであった。1865 年の一年間は互いに一通の手紙も交換していない。1864 年から 1866 年までの三年間弱の往復書簡は数通を数えるのみである。この間のサンドからフロベールへの手紙は、「拝啓」「前略」に当たる格式張っ

6）Cf. Conférence de Danielle Bahiaoui pour les Amis de George Sand, le 6 octobre 2012 à l'Hôtel de Massa : "Rapports entre Sand et Hugo" : « Oui, si quelqu'un se trompe c'est moi ! [….] mais moi douter de la grandeur et de la ferveur de vos intentions ? Maître, vous me châtiez beaucoup trop. Prenez-moi pour ce que je suis, une femme qui a besoin de la parole que vous savez dire. ». ユゴー（1802–1885）とサンド（1804–1876）は完璧に同時代を生きた作家であったにも拘わらず、実際に会うことは一度もなかった。しかし、ユゴーはサンドの葬儀の際、次のような感動的な弔辞を書きサンドの死を悼んでいる。: « Je peleure une morte, je salue une immortelle (…) Georege Sand était une idée ; elle est hors de la chair, la voilà libre ; elle est morte, la voilà vivante. ». Cf. Danielle Bahiaoui, *Correspondance croisée,* Éditions HB, 2004.

7）サンドはユゴーが「芸術家でありながら哲学者の側面を持っている」ゆえに、劇作『候補者』が不評だったことに悩むフロベールの「厭世観」を和らげてくれるだろうと考え、フロベールに『エルナニ』や『レミゼラブル』の著者に会いに行くよう進言している。フロベールはサンドの助言に従い、実際にユゴーのもとを何度か訪れている。サンドのフロベール宛への書簡（1874 年 12 月 8 日）参照。

た形式の文頭で始まり、文中では親しさを表す tu ではなく、距離を置いた vous が使われている。1866 年 11 月 22 日のサンドの吟遊詩人に宛てた手紙は、vous と tu が混在している。

1866 年 3 月以降、二人の往復書簡は規則的となり、平均して年に 20 通から 30 通の書簡が交換されるようになった。1867 年 1 月末の手紙から、サンドはあたかもフロベールと家族的な関係を構築するかのように親しみを込めた呼称を使い始めている。後述するように、サンドの手紙が敢然と tutoiement に移行するのは、翌年 1867 年 1 月 9 日からである。それまでは恣意的であった二人の文通は、この頃から頻度を増している。サンドはフロベールに対し「いとしい弟 Mon cher frère」「いとしい友 mon cher ami」「吟遊詩人さん Mon trouvadour」「私の大事な相棒さん Mon brave cher camarade」「そちらさん cher vieux」「お兄ちゃん mon pauvre enfant」「クリュシャールさん Mon cher Cruchard」といった親しみを込めた呼称表現を使っている。これに対し、フロベールの側では、文通の最初から最後まで一貫して vouvoiment を通し、サンドに「先生 Chère Madame」「親愛なる先生 Cher(e) maître」「お師匠様 Chère bon maître」といった呼称で呼びかけている。1866 年の末、サンドは 62 歳、フロベールは 45 歳であった。極く自然のなりゆきで年齢差が二人に vous と tu の使い分けをさせていたと考えられる。

一方、サンドは投函しなかった手紙の中で「自分は理論というものをもっていない」「私は無、絶無なのです」といった言説を多用し、フロベールに対してひどく謙遜し、自分の無知や弱さ、自信喪失の状態を露呈している。しかし、「先生」と呼ばれている側が自信喪失の状態では、二人が暗黙のうちに了解し、とりわけフロベールが維持しようとしていた師弟関係に揺らぎが生じてしまう。つまり、書簡を通して築いてゆくべき男女間の、恐らくサンドが望んだであろう、文学者同士の対等な人間関係を存続させてゆくために、サンドはフロベールにこの手紙を読んで貰いたくなかったのではないだろうか。実際、翌日の 11 月 30 日にサンドが書き直し投函したもう一通の手紙は、謙遜と気弱さに彩られた前日の手紙とは明らかに異なるトーンで書

かれていた。年下の作家に年長の作家が助言を与える通常のフロベール宛てのサンドの手紙文に戻っているのである。

これらの事実から、1866 年 11 月 29 日にサンドが書いた手紙はその後の往復書簡における人間関係を継続してゆく上で障害となる内容を内包していたためにサンドは投函しなかったものと推測される。これ以降の書簡の場では、サンドとフロベールは、安定した人間関係を築いていっている。その関係は上下関係を核とする一般的な師弟関係とは異なるものであり、そこには文学者同士の対話が中心となった対等な関係が構築されていた。

次章では、1866 年暮れ以降の二人の理想的な人間関係について考察を試みる。

Ⅱ．ジェンダーをめぐって：サンドとフロベールの場合

1.「理想的な」関係

サンドがフロベールに初めて会ったのは、往復書簡が活発に開始される 4 年前のことであり、出会いの場所は当時のパリの劇場で最も人気を博していたオデオン座であった。この頃はまだ生存中でサンドの秘書役を務め、几帳面に日誌をつけていた恋人マンソーは、1862 年 11 月 29 日の頁に「フロベール、カルタゴの小説（『サランボー』[8)]）を送ってくる」と記載している。およそ一ヶ月後の日誌には、この小説を読了したサンドの様子について、マンソーは「マダムはこれに満足」（12 月 26 日）と記した。周知のようにフロベールの『サランボー』は批評家たちに歓迎されなかったが、サンドは彼らとは逆の立場を取り、この小説を称賛する書評を翌月 1863 年 1 月 27 日の『ラ・プレス』紙に発表した。このことに感銘を受けたフロベールは、3 日後の 1 月 31 日にサンドに宛てた最初の手紙を送り、サンドの寛大さに感謝するとともに「書斎にかけておきたい」とその肖像画を所望したのだった。このようにして二人の往復書簡を介した友情が始まり、1864 年には『ヴィ

8）『サランボー』（1862）は、前世紀に消えた異教徒の都市国家を背景に、女神官サランボーと反乱軍の傭兵マノンとの恋物語が展開する、カルタゴと傭兵反乱軍との迫力に満ちた戦争ドラマである。

ルメール侯爵』の初演を共に観劇している。『ヴィルメール侯爵』は、オデオン座の歴史上、最大の成功を収めたと言われるサンドの劇作であった。

こうして始まった二人の友情は、次第に深化してゆく。「岩にへばりついた牡蠣」[9)]「年老いてやつれた砂漠のらくだ」[10)]「鉛の靴底のように地面に釘付けされている」[11)] と自らを形容するフロベールにとって、サンドは貴重な存在となった。サンドは遅筆の筆がさらに進まなくなりスランプに陥った時に助けを乞うことのできる唯一の友人となったからだ。フロベールによれば、筆の速いサンドは「大きな河のように着想が途絶えることなくたっぷり水が流れている」のに対し、彼自身の方は「一筋のちょろちょろとした水」にすぎなかった[12)]。年下のフロベールが師と仰ぐサンドに「後生ですから、急いでお手紙をください」[13)] と懇願する文を書き送る所以でもあった。

二人にとって互いの創作を読み、意見を交換することは書簡上の友情を継続する上で重要な要素であった。結果的には、寡作のフロベールの方がサンドの作品を読んでは「師匠」に所感を送る方が圧倒的に多かったのだが、例えば『コンシュエロ』についてフロベールは次のように書いている。

> コンシュエロ（……）僕は再び夢中になりました。なんという才能、まったく。なんという才能でしょうか！（……）ポルポラがコンシュエロの額にした口づけに僕は先程ほんとうに涙を流しました……あなたを擬えるのにアメリカの大河よりほかに適切なものを僕は見つけることがで

9）フロベールからサンドへ。1868 年 9 月 9 日付の書簡。

10）フロベールからサンドへ。1875 年 3 月 27 日付の書簡。

11）フロベールからサンドへ。1868 年 9 月 9 日付の書簡。

12）フロベールからサンドへ。1866 年 11 月 27 日付の書簡。Vous ne savez pas, vous, ce que c’est que de rester toute une journée la tête dans ses deux mains à pressurer sa malheureuse tête pour trouver un mot. L’idée coule chez vous largement, incessament, comme un fleuve. – Chez moi, c’est un mince filet d’eau…. 下線部は筆者による。

13）フロベールのサンドに宛てた手紙。1874 年 9 月 26 日付。

きません。それは　まさに「巨大さ」と「優しさ」なのです。[14)]

4日をかけてフロベールが読破した『コンシュエロ』およびその続編『ルードルシュタッド伯爵夫人』は、サンドの最高傑作の一つに挙げられる長大な歴史音楽小説である。この大作を読んで感動したフロベールの目にサンドの作家像は以前とは違ったものに見えた。単なる大きな河から「巨大さ」と「優しさ」を象徴する広大な国を流れる「アメリカの大河」に姿を変えたのだった。

さて、先述したように1860年代後半から二人は、以前より頻繁にまた規則的に書簡をやり取りするようになっていった。その間には、互いにそれと知らぬまま、同じ日に手紙を投函しあっていたというハプニングも起こり、こうした偶然の一致を二人は面白がったりしている。サンドはフロベールに次のように書き綴った。

わたしたち二人は極めてかけ離れた労働者同士だと思います。でもこんな風に愛し合っていますから、万事うまくいきます。お互いのことを同じ時間に考えていたのですから、自分と正反対のものを必要としているのですね。時々は、自分ではないものと一体化することで互いに補い合うのです。[15)]

そこには、誠実な友情の交換があり、互いに必要としあっている様子が窺われる。二人は、手紙を要求しあった。サンドは臆することなく、自分と性も年齢も異なるフロベールに対し「愛している」という驚くべき言葉を使った。フロベールさえ、後年になると「あなたを心をこめて愛します」と「愛」の文字で手紙を締めくくることがあった[16)]。ベアトリス・ディディエ

14）フロベールからサンドに宛てた手紙。1866年12月27日付。

15）サンドからフロベールへの手紙。1869年1月17日付。

16）1876年2月18日付サンド宛ての手紙。フロベールは「私は本当にうれしいのです、あなたは私によい影響ばかり与えて下さいます。あなたを心をこ

が「書簡を通して構築された理想的な関係のおかげで、二人の吟遊詩人は彼らの肉体の存在を戸惑わせるような愛の表現を使うことができたのだ」と述べているように、肉体関係に直結する危うさと紙一重のこうした表現は、交流の場が書簡という身体的条件をもたない場であったがゆえに可能だったと言えるだろう。二人は会う約束をする。しかし、フロベールが出不精であったこともあり、実際の出会いはなかなか果たされず、しばしば延期された[17)]。このことも「理想的な関係」を継続させるための賢明な一策であったと見なし得るだろう。

ところで、二人が構築したいわゆる「師弟関係」は、今日の一般的な師弟関係とは異なる側面を持っていた。19 世紀というナポレオン民法典が女性の自由を前世紀より遥かに強く束縛する時代であっただけに、複雑な要素が二人の書簡上のジェンダー関係に作用したのだった。否応無しに往復書簡の場に侵入してくるジェンダーの問題を二人はどのように解決し、「理想的な関係」を構築していったのだろうか。

2.「第三の性」

男は創作や生産を司り女は生殖に携わるものとする男性優位思想が席巻していた 19 世紀フランス社会にあって、女性作家であり続けることは現代人が想像する以上に困難を伴うものであった。サンドがパリで作家修行をしていた際にケラトリーという某作家に原稿を読んでもらったことがあったが、この作家が「女は本を書くものではない。子供を作るものだ」とサンドを素っ気なく扱ったエピソードはよく知られるところである[18)]。イザベル・ナジンスキは当時の男性作家に対する文学批評と女性作家に対する処遇には明らかに大きな違いがあったと次のような例を紹介している。男性作家が他の作

めて愛します。(……) さようならお優しい先生 (……) あなたを深く愛しているあなたの年老いた Gve. フロベール」という表現で手紙を終えている。

17) Cf.Yvette Auriac, “Au fil de la plume, entre Nohant et Croisset”, in *Revue du Réseau CNDP*, no. 42. http://www.crdp-montpellier.fr/ressources/frdtse/frdtse42c.html　2012 年 12 月 23 日閲覧

18) Cf. George sand, *Histoire de ma vie*, t. II., p. 150.

品を模倣した作品を書いた場合には、「自分のものにしている digérer」あるいは「変化を加えた transformer」とされた。また、他の作品の文章をそのまま書き写してしまった際には、作家修業の途上の一時的なミスとして男性作家の場合には咎められることはなかった。しかし、女性作家が自らの師である作家の影響のもとに書いた作品は、「奴隷根性で原書を模写した」と激しい非難を浴びたのだった。女性作家には女性であるがゆえに、いかなる誤りも作家修業中の間違いも一切許されなかったというのである[19)]。

サンドの場合も例外ではなく、新聞『フィガロ紙』を主宰していた批評家のアンリ・ラトウーシュが、サンドの出世作『アンデイヤナ』の原稿の冒頭を読んで思わず発した言葉は次のようなものであった。

> まったくもってその通りだ。こりゃ、バルザック流じゃないか。模倣品だ。そうだろうが。その通りだろうに。[20)]

このラトウーシュのリアクションは特殊なものではなく、当時の男たちに普通に見られる極く一般的な反応であった。サンドは当時、妻より所有財産が少なく妻の所領地に居住していた夫からわずかな生活費を貰い、パリで貧しい作家修業をしていた。そんなサンドの筆力をラトウーシュは高く評価し『フィガロ紙』に記事を書くアルバイトを紹介してくれた。その理解あるはずのラトウーシュにしてこの有様だったのである。しかしこの場合、『アンデイヤナ』を最後まで読み感動したラトウーシュは前言を翻し、翌朝、マラケ河岸のサンド宅に謝罪しに行くことになったのであった。

一般に、女性が男性と同じように本を書くことの禁忌、女性が創造的な仕事に関わり自立することに対する執拗な拒絶に関し、19 世紀の男性知識人たちは醜悪でさえあった[21)]。しかしながら、ペンを持つ女性を排除しようと

19）Isabelle Naginski, “George Sand : ni maîtres, ni disciples” in *Romantism*e, Persée, 2003, p. 48.

20）*Histoire de ma vi*e, *op. cit*, p. 173.

21）Cf. Christine Planté, *La petite soeur de Balzac*, *Essai sur la femme auteur*,

する偏見に満ちた言動はその時代に限ったものではなく、近・現代批評にも認められた。例えば、『コンシュエロ』とその続編『ルードルシュタッド伯爵夫人』の一部はサンドではなく、当時のサンドがその影響のもとにあった社会思想家で哲学者のピエール・ルルーが書いたとする説があった。また、『スピリデイオン』は部分的にルルーが執筆したと断言するダヴィッド・オーウェンズあるいはフェリックス・トマといった近代の文学批評家たちが存在した。さらに歴史家サラヌ・アレクサンドリヤンになると「ルルーは自分の妻に子供を作らせるようにサンドに本を書かせた」とさえ主張したのだった[22)]。

当時の意地の悪い批評家たちに真摯に耳を傾け、サンドは前作を書き改め新作を発表した。すると、今度は前回とは違う観点から酷評され、書く度にあらゆる批判に晒されるのだった。サンドは、こうした女性作家であることの苦悩をエッセイ集『文学と芸術の諸問題』に書き記した[23)]。

このような状況にあっては、女性作家がこの時代に男性作家の師匠になるなどということは想像を絶する事態であった。それにも関わらず、フロベールはサンドを「師匠」と呼んだ。ここには『紋切り型辞典』の作者フロベールの世の偏見やステレオタイプの思考を拒絶する、画期的かつ革新的な先進性を認めることが出来るだろう。

注目すべきは、こうしたフロベールの女性に理解ある先進的なジェンダー観は、サンドとの出会いの後に獲得されたものであり、それ以前のフロベールは男性中心主義の女性嫌いそのものだったことである。フロベール書簡集は、サンドとの邂逅以前の1840年、とりわけ50年代の『ボヴァリー夫人』の著者が明らかに男性優位主義の立場を取っていたことを明示している。

Seuil, 1989.

22） Isabelle Naginski, “George Sand, : ni maîtres, ni disciples” in *Romantisme no. 122,* (2003–2004), p. 48. ここでは10人もの子供がいたピエール・ルルーを暗に揶揄している。

23）George Sand, *Questions d’art et de littérature, Calmin Lévy,* 1878, pp. 1–4.

僕は何よりも、褐色の肌で力のみなぎった、中身が濃く、明確で、筋肉たくましい文章が好きです。女性的な文章ではなく、男性的な文章が好きなのです。[24)]

このフロベールにとっては、ラマルチーヌの文章表現は「物憂く」「睾丸が欠けている」許し難いものであった。畢竟、恋人のルイーズ・コレの創作に関するアドバイスも「君の段階に到達したら、下着が乳臭くてはいけないし（……）胸のふくらみじゃなくて筋肉が見えるよう、胸はできるだけ小さく圧縮して中に押し込めてしまうようにしなくてはいけないよ。」ということになり、コレが書く女性的な文体を、終始、拒否している[25)]。女性作家は女性の身体を否定し、男性的な文体で書かなくてはならないと強調するのである。そこには、次の引用が示しているように、ロマン主義を女性的なものと見なす 40 年代 50 年代のフロベールの執拗な拒絶反応が読み取られる。

君は今やすべてが緩んでしまい、涙やおしゃべり、乳といった湿っぽい要素があらゆるものを破壊していると感じないかい？　現代の文学は女性の月経の中で溺れているんだ。我々はルソー、シャトーブリアンやラマルチーヌが我々に伝えてきた貧血症のゴシックロマンスに執心するこ

24）Flaubert, *Correspondanc*e. I., le 7 juin 1844, p. 210.

25）19 世紀は肉体と精神、身体と魂の関係に関する激しい議論とともに始まったと言われる。1844 年に神経症を煩ったフロベールは、この問題を物質主義と精神主義という単純な二項対立のテーゼに還元してしまう当時の哲学に不満を抱いていたが、自身の探究の結果たどり着いたのがフロベール流の矛盾した一元論の「物質精神主義」であった。Cf. “L’âme et le corps chez Flaubert : une ontologie simple” par Juliette Azoulai,thèse de doctorat en langue et littérature françaises, présentée et soutenue publiquement le 16 novembre 2012. Martin S. Staum, « Cabanis,Enlightenment and Medical Philosophy in the French Revolution “, *Revue d›histoire des sciences* , Vol. 35, 1982, pp. 367–369. 村松正隆、「感覚性・共感・模倣：カバニスの人間学を巡って」、跡見学園女子大学マネジメント学部紀要 創刊号、2003、pp. 103–115.

とをやめにして、押し並べて鉄分を吸収しなくてならないのだ。[26)]

しかしながら、60年代になってフロベールが文通することになった相手は女性であるだけでなく、ロマン主義文学を体現する作家ジョルジュ・サンドであった。フロベールがこれまでに会ったことのない男性的なタイプの女性作家サンドは、フロベールのジェンダー思想の形成に大きな意味をもったと言っても過言ではないだろう。

サンドはその単純率直な性格が男性的なだけでなく、文体自体にも男性性が鏤められていると言われる作家だった。事実、処女作『アンデイヤナ』を読んだ読者の中には、当初、サンドを男性作家だと思った人々が多く存在した。「ジョルジュ George」という男性的な筆名もその遠因ではあったが[27)]、それでもなお「簡潔典雅な atticisme」文体には、女性が書いたとは思われぬ男性的 viril な側面が認められた[28)]。この両性具有的な文体を19世紀ラルース事典は「定義しがたい文体」と表現したが[29)]、両性具有性はサンドとフロベールが好む存在のあり方でもあった。フロベールがサンドに傾倒していったのは、両性具有的な存在の作家であったことに起因していると推測される。サンドはフロベールがお説教しても女性的な文体でしか書かないルイーズ・コレとはまったく異なる作家だったのである。

さて、時折、往復書簡の場で噴出するサンドとフロベールの間の意見の対立や確執は、相手の中に自身との共通項を見いだすたびに少しずつ緩和されていった。サンドは性単一説にこだわっていた。幼なじみのデュテイユがサンドのことを「男でもなく女でもない。一つの存在だ」と言っていたからでもあった[30)]。ルイーズ・コレと別れたフロベールのジェンダー観は、50年代

26）Flaubert, *Correspondanc*e. II., le 15 janvier 1854, pp. 508–509.

27）ジョルジュ・リューバンによれば、Georges はサンドの生地ベリー地方では「大地の人」という意味である。

28）サンドの文体に関する卓越した研究書として次の書を参照。Eric Bordas, *Indiana de George Sand*, Gallimard folio, 2004.

29）Cf. Larousse, *Grand Dictionnaire universel du XIXe siècle (1866–1879)*.

30）George Sand, *Correspondance*, t.II, Garnier, 1966, p. 880.

に激しかった男女を身体的に二分するフロベール流の「性の二項対立論」から二つの性を統合した「一元論」へと変化をみるようになっていた。この変化の原因の一つは、フロベールがサンドの中に「男でも女でもある」「第三の性」の作家を発見したことに由来するものと推測される[31)]。そこには「自分が二つの性をもっている」と考えていたフロベール自身との相似性をみることができるのである[32)]。

先述したようにサンドとフロベールの間に男女の師弟関係を構築することは 19 世紀という時代には困難であったが、書簡を仲介とする二人の人間関係は、創作、批評など文学や社会、政治について、対等かつ自由に物事を表明し合える関係へと変化していった。サンドが「第三の性」と規定され、フロベールが自分自身には「女性的な側面がある」とサンドに漏らしたことにより性が中和されたからであった。そして、このことにより、世間一般の常識的な「師弟関係」ではない、文学の理想を目指す両性具有的傾向をもつ者同士に固有の「理想的な関係」を構築させたと考えられるのである。

Ⅲ．サンドの『夢想者の物語』とプラトンの「人間球体論」

書簡集を通して見えてくる二人の共通項は、反教権、反ブルジョワ、反アカデミーなどであるが、なかでもとりわけ着目したいのは、フロベールの言葉を借りるなら、サンドもフロベールも「プラトンの信奉者」であったという事実である。ここでフロベールが喚起している「プラトンの信奉者」とは、換言すれば、両性具有論の支持者であり「真・善・美」の哲学を信じる人間と解釈し得るだろう。フロベールはサンドに宛てて、次のように書いている。

31）Lettre du 19 septembre 1868 : « Mais cependant, quelle idée avez-vous donc des femmes, ô vous qui êtes du Troisième Sexe ? » *Correspondance Gustave Flaubert / George Sand*, éd. Alphonse Jacobs, 1983, p. 196.

32）「なぜ僕はリヴェラーニ（コンシュエロの夫）に恋しているのでしょう。恐らく、それは僕が二つの性をもっているからです。」: フロベールからサンドに宛てた書簡。1866 年 12 月 27 日付。「ボヴァリー夫人は私だ」という言葉にも同様の暗示的意味が内包されている。

僕はアクロポリスの壁（……）を観察したとき、胸が高鳴ったことや激しい喜びを感じたことを思い出しました。書物が（……）同じ効果を生み出すことができないかと自問しています。（……）僕はプラトン主義の信奉者と話しています。正確な語と音楽的な語の間になぜ必然的な関係があるのでしょう。なぜ考えを凝縮すると一行の詩を書くことになるのでしょう。[33)]

他方、フロベールは姪のカロリーヌ（愛称ルル）への手紙でプラトンの『饗宴』と『フェードル』をヴィクトル・クザンの翻訳版で読むよう奨めている。妹カロリーヌが他界した後、恋人となった女性詩人ルイーズ・コレに対してもフロベールは、「君は理想が好き」なのだから「哲学者の翻訳によるプラトンを読むように」と進言した。ここでフロベールが言及している哲学者とはヴィクトル・クザン（1792–1867）のことで、彼はルイーズ・コレがフロベールの恋人となる前の愛人であった[34)]。恋人の元愛人が翻訳した本を読むよう恋人本人に薦めるのは一般常識ではあり得ないことに思われる。が、ここでは、プラトンを敬愛するあまりに個人的領域の感情は二の次となってしまっているフロベールの姿をみるのが妥当ではないかと思われる。

では、サンドがプラトン哲学の信奉者であったという証拠はどこに存在するのだろうか[35)]。先の引用でみたように、サンドは投函しなかったフロベー

33）フロベールからサンドへの手紙。1876 年 4 月 3 日。下線部の強調は筆者。

34）Jacques Derrida, « Une idée de Flaubert : « la lettre de Platon » in *Revue d'Histoire littéraire de la France*, juillet-octobre, 1981, pp. 658–676.

35）サンド研究におけるサンドとプラトンとの関係については、これまでイザベル・ナジンスキがサンドの作品を総合的に取り扱った著作の中で言及している。Cf. Isabelle Naginski, *George Sand L'écriture ou la vie*, Honoré Champion, 1999, pp. 53–73. しかしプラトンの人間球体論とサンドの『夢想者の物語』の間テキスト性に注目する研究は、日本で発表された筆者による論考が初めてである。本稿はこの論考をもとに加筆修正したものである。参照：「ジョルジュ・サンドにおける変装の主題—1830 年代の作品をめぐって—」in『慶應義塾大学日吉紀要　フランス語フランス文学』、慶應義塾大学日吉紀要観光委員会、2008 年、pp.13–40.

ル宛ての手紙の中でプラトンについて言及しているが、サンドがプラトン哲学に心酔していたことは、1836 年にピエール・ルルーに宛てた次の手紙が明きらかにしている。

> ルルーの記事はとてもよく書けています。私は大好きです。彼がヴォルテールをあのように扱い、私の聖なるプラトンをあれほど見事に論じてくれたことに感謝しています。[36)]

後述するようにサンド＝フロベール往復書簡にもプラトンに関する記述がみられるが、ここでは『饗宴』に書かれている「人間球体論」とサンドの『夢想者の物語』の連関性について俯瞰しておきたい。

『夢想者の物語 *Histoire du rêveur*』は 1830 年初頭にサンドが書いた短編小説である。出版の日の目を見ることなく原稿のまま放置されていたこの作品は、サンドの死後、1924 年に『両世界評論』誌に掲載された。単行本として初めて出版されたのは 1931 年のことで、孫のオロール・サンド Aurore Sand の尽力によるものであった [37)]。

『夢想者の物語』には、性が定かではない不思議な存在が登場する。ロバ一匹を道連れにシチリアの火山のクレーターを見にエトナ山を訪れた若き孤独な旅行者アメデ Amédée は、山中で野宿をした夜、不思議な経験をする。素晴らしい声を持つミュージシャンでもあった彼は、山間に美しい歌声が木霊するのを聞いたのだ。歌声の主は、赤いマントを着たシチリアの少年であった。アメデはその少年の歌の技量と天才ぶりに驚嘆する。二人は交代でロバに乗って旅を続け、強風の中を手に手を取り、エトナ山のクレーターに近づく。大音響とともに火山が爆発し、火を噴き灼熱の溶岩を吐き出す。見知らぬ少年はいつの間にか聖霊となってアメデに赤いマントを投げかけ、「人間の生に別れを告げ、霊界まで私についてきてください」と言うのだった。

36）1836 年 2 月 23 日『両世界評論』の編集長 F. Buloz に宛てたサンドの手紙。Cf. Pierre Lacassagne, *Histoire d'une amitié*, Klinksieck, 1973, p. 8.

37）Isabelle Naginski, *op.cit*., p. 53.

火山は恐ろしい勢いで溶岩を流れさせ、彼らのところまでやってきた。アメデは一気に骨の髄まで炎が侵入したと感じ、見ると自分の半身は溶岩の流れに持ち去られ、溶岩の残骸の上に残っていた。その瞬間、自分のもう一方の半身が官能的な腕に包まれるのを感じた。そして、赤いマントの相棒が美しい女性になっているのを見たのだ。山岳地帯の少年から優雅で魅惑的な女性に変身した少年は、金とダイヤモンドが散りばめられたドレスを着ており、その長い黒髪をなびかせていた。ルビーを肩のところに留めた赤いマントはたゆとうように彼女の体にまとわりついていた。妖精のような彼女はカモメが翼を広げ透明の波の上をすべるかのように身軽に溶岩の上を走る。火山の噴火の音を伴奏に美しい声で歌いながら。アメデは彼女に髪を捕まれ、彼女に抱かれて火山の深淵に飛び込んだ。そして揺れ震える炎の褥の上で夢見心地の時を過ごすが、彼女の唇に触れたと思った瞬間、電気ショックに打たれ、気がつくと「山羊の洞窟」の中の乾いた枯葉の床の上にいたのだった。

ところで、エトナ山が爆発し、主人公が自らの半身を溶岩の上に見る場面はプラトンの「人間球体論」を想起させる。「人間球体論」を要約すると、かつて人間は球体であり、手足がそれぞれ4本あり、一つの頭の両側に顔がついていた。この球体は、男アンドロ（男―男）、女ギュロス（女―女）、アンドロギュロス（男―女）の三種類の組み合わせにより構成されていた。ゼウスはこの球体の人間が生意気にも神に刃向かうのをみて、これを二つに切断してしまった。半身は本来の「完全」な姿になろうともう一方の半身を求める。この完全を求めることが「恋愛エロス」である、という説である。

サンドがこの神話に基づいた興をそそる不思議な説に魅かれ、独自の作品を創作したのは想像に難くない。精神的な愛と身体的な愛が完全に一致する絶対の愛を探究していた当時のサンドが、プラトン哲学の「人間球体論」に魅かれたのは、当然のなりゆきだったともいえるだろう。

半身のアメデが美しい女性と結ばれる場面は恋愛エロスの成就であり、理想の完遂と捉え得る。他方、アメデが夢から覚めたときに居た場所は洞窟だが、洞窟という場所もまたプラトンの「魂の向けかえ」と呼ばれる洞窟の比

喩を喚起していると言えるだろう[38)]。

また、プララトンが『共和国』の中で述べている死後の世界と魂の不死に関する説には、サンドが後に強い関心を抱いたスエデンボルグの神秘思想、あるいはサンドも創刊者となった『新百科全書』の編集者ピエール・ルルーが提唱する輪廻転生説に通底する。このように、サンドの『夢想者の物語』には明らかにプラトンの『饗宴』および『共和国』の影響が認められるのである。

Ⅳ.「形式」か「内容」か：反目から融和へ

18 世紀は解放へと民衆を率いるルソーと貴族主義のヴォルテールの対立関係が刻印された世紀でもあった。この構図を反映するかのように、二人の作家の間には政治哲学思想に関し同様の隔たりがあった。フロベールがヴォルテールを高く評価していたのに対し、サンドの方は自らを「ルソーの娘」と称すほど『社会契約論』の著者を敬愛していたのである。サンドはルソーが祖先と親交があったと『我が生涯の記』に記しているが、ルソーは実際にサンドの祖父母宅を訪れ彼らと親しい友人関係を結んでいた。こうした肉親の交流がサンドに親近感を与えたことは容易に類推される。ルソーの思想はサンドにとって「モーツアルトの音楽のように心地よい」ものであった。18 世紀の啓蒙思想界におけるヴォルテール派とルソー派という異なる二つの流れ、これと二重写しになる二人の作家の違いを示す構図は説得力を持つ図式だと言えよう。

しかし、それにもまして、サンドとフロベールとの間に刻み込まれた最大の隔たりは創作や文体に対峙するときの作家の姿勢にあった。フロベールは

38）洞窟の中で奥の壁に向いたまま縛られている人々は、入口からは太陽の光がさしこんでいるが振り返ることができないので、それが太陽だということを知らない。彼らは、背後で通っていく人々も目の前の壁に映る影で見ている。この影の実体を知らしめ、そしてさらにその実体を実体たらしめている太陽（イデア）を知らしめること、それこそが教育の役割であるとプラトンは主張する。Cf.『共和国』第 7 巻。

精緻な客観描写を極めることに専心し、自由間接話法を駆使し、没個性の細密な心理描写と徹底した推敲をおこなった。しかし、サンドにとってフロベールの創作方法は「形式を重んじすぎて本質を軽んじる」やり方であった[39)]。サンドはその理由をフロベールが非人称の「文学作品の中に個人的な見解を入れることを拒否している」からではないかと推察する。「朝から晩まで閉じこもっている。一文字も書いていない」とフロベールは嘆き[40)]、痛風にもかかり耐え難い憂鬱に囚わていると「先生」に訴える[41)]。しかし、サンドは手厳しくこれを批判する。彼の創作した作中人物の中でもとりわけ「『感情教育』の登場人物たちは「意志薄弱で、根っからの悪人は別にし、全員が破綻してしまいます。読者が非難するのはこの点なのです。悪い人間を勇気づけ、気高い努力を台無しにするその嘆かわしい社会をあなたが描出しようとしたことを読者は理解しなかったのです。」彼らには「自分自身への行動や働きかけが欠けていたのです。彼らは事件を甘受するだけで、決して自分からは行動しようとしないのです。」

「行動しない、そのことが問題だ」とサンドは指摘し反対意見の持ち主に対しても敢然と向き合い、怯むことなく自分の信条を堂々と表明する[42)]。

> 作品の中に少しも自分の心を書き込まないですって？　私にはまったく理解できません。ええ、まったくです。それ以外のものを描くことは不可能だと私には思われます。[43)]

39）サンドからフロベールへの手紙。1875 年 12 月 18–19 日。

40）フロベールからサンドへの手紙。1868 年 1 月 12 日。

41）フロベールからサンドへの手紙。1875 年 5 月 10 日。

42）サンドからフロベールへの手紙。1875 年 12 月 18–19 日。

Cf. フロベールからサンドへ「洗練された文章は無価値ですが、僕はうまく書くことはすべてだと思います。うまく書くこと、それは同時によく観じ、よく考え、そしてよく言うことであるとビュフォンが述べているからです。」（1876 年 3 月 10 日）

43）フロベールからサンドへの手紙。1866 年 12 月 17 日。

サンドのこの激しい反駁に対し、フロベールは「あなたは私のような人間ではありません、あなたは！」[44]「私の作中人物についてあなたが個人的な意見を示すことは、反対です。ええ、絶対に反対です！」[45] と自説を曲げず、両者は書簡を仲介にして激しく争い、コミュニケーションの場であるはずの往復書簡という磁場は熾烈な論争の場へと豹変する。

一連の論戦の後、二人の文通者が頼る和解の戦略は沈黙である。暫くすると二人は再びお互いの消息を尋ね合い、家族について語り、助けが必要ならば惜しみない援助の手をさしのべようとするのであった[46]。

ところで、サンド＝フロベール往復書簡には純粋に文学的な文脈というより、社会文化的な文脈も存在した。例えば、次のような文面はこうした文脈の一端を示している。

> 文学が商品である以上、それで利益を上げる売り手が尊重するのは、買ってくれる客だけです。文芸共和国は、本が売られる市場にすぎません。出版社に譲歩しないことが、われわれの唯一の美徳です。それを守り、難色を示す出版者とも仲良くしましょう。そして悪いのは、彼ではないことを認めましょう。読者が審美眼をもっていれば、出版者にも審美眼が備わるでしょう。[47]

他方、助言を与えていたのはサンドばかりではなく、フロベールの側でも師匠のようにアドバイスを惜しんでいなかったことが次の文面に読み取るこ

44）フロベールからサンドへの手紙。1871 年 11 月 14 日。

45）フロベールからサンドへの手紙。1876 年 2 月 6 日。

46） 1875 年 10 月、姪のルルが破産に追いやられ、フロベール家がクロワッセの館を手放さざるを得ない危機的状況に陥ったとき、サンドは自分がその家作を買うので、フロベール一家はそこに住み続ければいいと提案した。フロベールはこのサンドの熱い友情と寛大な心に涙したとサンドに書き送っている。

47）サンドからフロベールへの手紙。1872 年 11 月 29 日。

とができる。

> 検閲とは何と結構なものでありましょう。あらゆる政府は「文学」を憎悪します。「権力」は他の「権力」を好まないのです。『ラ・カンティニ嬢』の上演が禁じられたとき、あなたは毅然としすぎておられたのです。大切な先生、そうでなければ無関心すぎたのです。不正と「愚劣」には常に抗議し、怒鳴り、射切り立ち、容赦なく否定しなければなりません。[48)]

サンドは、月曜日にレストラン・マニー亭に集う作家の中で紅一点の女性作家だったが、この集いでサンドにとって堪え難かったことは性差の問題ではなく、男性作家たちの作家の使命感に関する考えに齟齬があったことであった。サンドはフロベールに対して、このことを率直に述べている。

> 自然な社会が存続するために挙げるべき第一の法は、人々が蟻やミツバチのようにお互いに役に立つことです。（……）人間にあっては、本能とは愛することです。愛から忘れられる者は正義からも忘れ去られてしまうのです。（……）マニー亭で、彼ら（参会者）たちは「無知の人間のために書く必要はない」と言いました。私はその無知な人々のために書こうとしているので、彼らは私を口々に罵りました。経営者たちは資産があり、金を持って満ち足りています。愚か者たちには、あらゆるものが欠けているのです。私は彼らを気の毒に思うのです。愛することと気の毒に思うことは、別々に考えることはできないのです。これが、至ってシンプルな私の考えのメカニスムなのです。[49)]

誰のために書くかという疑問は、文通者の間でも問題となった。フロベールは、「僕は現代の読者のためではなく、言語が生きている限り、存在するすべての読者のために書いているのです」と云い、「僕のやっている仕事

48）フロベールからサンドへの手紙。1873 年 9 月 5 日。
49）サンドからフロベールへの手紙。1871 年 10 月 25 日。

は、だから確固たるものではありません。したがって、お金では買えないのです。」と主張した[50]。他方、サンドはより謙虚に次のように述べた。

> 私の野心はあなたほど大きいものではありませんでした。あなたはあらゆる時代のために書こうとされます。この私は50年後には完全に忘れ去られているでしょう。激しく非難もされるでしょう。それが一流ではない物事の法則です。私は一度として、自分が一流の人間などと考えたことがありません。私の考えはむしろ、たとえ何名かであれ、同時代の人々に働きかけ、喜びと詩情の理想を彼らと共有し合うことなのでした。[51]

フロベールは透徹した理性主義をもって人物や事物を緻密に描く。しかし、文学史上、希にみるリアルな筆致は、単に見たままを描いているのではない。理性主義の仮面の下で文体の天才、フロベールには人間に対する熱い好奇心がたぎっていた。そのことをサンドは知っていたと思われる。1876年、フロベールは「形式」か「内容」かの二者択一の問題で逡巡し悩んでいた。フロベールのサンドに宛てたこの問題について自問しているという内容の手紙は3月初旬まで何通も続いた[52]。サンドは体調のせいだったのだろう、ほとんど返信することが出来ない状態になっていた。しかし、年初めの最初の手紙で「写実主義を嫌悪している」というフロベールに「小説は人間的だあるべきだ」とサンドは切々と訴えた。3月10日、フロベールは突然、これまでの苦しみから解き放たれたようにサンドに手紙を書き送った。「洗練された文章は無価値ですが、うまく書くことはすべてだと僕は思います」といつものフロベール独自の見解に執着しながらも、文体の巨匠は「結局のところ、「形式」と「内容」はどちらかが欠ければ他方も存在しない二つの巧妙

50）フロベールからサンドへの手紙。1872年12月4日。

51）サンドからフロベールへの手紙。1872年12月8日。

52）1876年1月から5月末までにフロベールがサンドへ送った手紙は7通を数える。体調が悪化していたサンドはそれでも4通の返信を送った。そのうちの二通はかなり長いものだった。

さであり二つの存在なのです」という結論に至ったからであった。こうして、サンドの死の直前になってフロベールの論議の対象となっていた「形式」と『内容』の問題は解決された。二人は対立状態から解かれ、ようやく和解と融和にたどり着いたのだった。

結び

1876年1月半ば、70代になってから体調がひどく悪くなっていたサンドは、フロベールが「お手紙の長さに打たれた」と感激した長大な手紙を吟遊詩人に書き送った。この手紙の冒頭で、サンドはプラトンの哲学に通じる理念を説いている。「自分の鼻の影しか見えないような曇りガラスの後ろに立たないこと、（……）至る所に、善、悪を見つけること」そして「あらゆる物事が「真」「善」「美」の方向へと必然的に引き寄せられているということに気づくこと」が大切だと述べている。「真」「善」「美」はプラトンが「対話編」で提唱した概念であり、それぞれ学問・道徳・芸術が追求目標とする三つの大きな価値概念とされている。往復書簡では、プラトンの理念は、プラトンの名前を挙げることなく、間接的に控えめな形で提示されている。

サンドは最後までフロベールに対し「極度の客観性は非人間的なことであり、小説は何よりもまず人間的であるべきです」「巧みな表現は感動からのみ生じ、感動は確信から生まれます。心底まで信じていないようなものに人は決して感動しないものです」と主張し続けた。「作家は読むことを渇望する人のために、優れた書物が役立つことのできるすべての人々のために書かなければなりません」「生命は永遠に続くでしょう。したがって仕事も永遠です。そうであれば、勇気をもって私たちの行程を遂行しましょう。（……）それは義務なのです。（……）私たちの堕落は彼らを巻き添えにします。彼らが倒れないためにわれわれは立っている義務があります」と、いはばサンドのイデアリズムを語り、かつて1838年2月にノアンの館でバルザックと語り明かしたときのように、作家の社会的使命の重要性を強調した。その一方で、「わたしたちは同じ意見なのです」「人はどんなことも出来るのです。よじ登ること、毎日階段を登り」、「明日のフロベールは昨日のフ

ロベールより堅固でより炯眼であると自らに云うつもりならば、持っていないと思っていた力も備わるものなのです」とフロベールへの丁寧すぎる程の励ましと助言の言葉が続く。3 日間、手元に置き、毎日火にくべようと思ったとサンドが吐露するこの手紙の末尾には「形式に対する信仰はそのままにして、内容にいっそう専念なさってください」「写実主義者たちの陳腐を離れ、（……）真実の現実に戻ってください。そこでは善意の占めるべき場と果たすべき仕事があります」という最後の忠告が添えられ、この手紙は投函されたのであった[53)]。

フロベールの方は、この時期、サンドの作品の『ペルスモンの塔』および「不覚にも、2、3 度涙を流してしまった」という『マリアンヌ』を読了していた。これらの作品に感動したフロベールは「心からお礼を申し上げます、先生。（……）私は本当にうれしいのです。あなたは私によい影響ばかり与えてくださいます。私はあなたを心をこめて愛します」と心底からの謝意を表明している。そして、サンドの影響が直接認められる物語『純な心（まごころ）』の執筆に着手したのだった。そしてサンドに次のように書き送った。

> 『純な心（まごころ）』と題した別の短編を書き始めました。（……）『純な心（まごころ）』をお読みになれば、そこにあなたの直の影響が認められ、僕があなたの思っておられるほど頑固者ではないということがお分かりになるでしょう。このささやかな作品の中に描いた道徳的傾向、というよりむしろ人間の心の内面をきっとあなたは気に召されることと思います。[54)]

サンドがこの世を去ったのは、フロベールがサンドにこの手紙を送ってから、わずか 10 日後の 1876 年 6 月 8 日のことだった。葬儀で二度も号泣したフロベールの涙は、彼女のために書いた物語を本人に読んで貰うことが叶

53）1876 年 1 月 12 日に書かれたが、3 日後に投函されたサンドからフロベールへの手紙。

54）フロベールからサンドに宛てた最後の手紙。1876 年 5 月 29 日。

わなかった無念そのものだったに違いない。

亡くなる前にサンドがフロベールに宛てて書いた 1 月 12 日付の手紙は長大なものであった。サンドはそこにフロベールの創作に役立つようにと心をこめて最後の助言を丁寧に書き記したのだった。二ヶ月後の 3 月 25 日の手紙には、村の司祭が痛風に見舞われたときに言っていたという「そのうち治まるだろうて。あるいはこの私が消え去るだろうて。」という言葉とともに「素晴らしい春です。大地は花と雪に覆われています。」とサンドの大自然への賛歌が記されていた[55)]。

本稿ではフロベールとサンドに関するマルチーヌ・リッド Martine Reid、クリスチーヌ・プランテ Christine Planté、イザベル・ナジンスキ Isabelle Naginski、ブリジット・ディアズ Brigitte Diaz 等の先行研究を基に、これまで明るみにされてこなかったサンドとフロベールの共通項に焦点を合わせて考察した。とりわけ往復書簡を時系列に沿ってあるいはテーマ別のパラダイムに従い、未開拓の分野であったサンドとフロベールのジェンダー思想の共通性およびプラトン哲学の影響について論究を試みた。解明できた点は必ずしも多くはないが、若干なりとも貢献できたと思われる[56)]。19 世紀における科学哲学思想（カバニス等の身体と魂に関する人間学）とサンド文学の関連性を今後の研究課題としたい。

55）サンドからフロベールへの手紙。1876 年 3 月 25 日。

56）本年の 6 月末ベルギーにおいて 3 日間にわたり大規模なジョルジュ・サンド国際学会「理想を描写する：ジョルジュ・サンドの探求 Écrire l'idéal : la recherche de George Sand」が開催される。この大会には全世界のサンド研究者が集結する（日本ジョルジュ・サンド学会から 4 名が発表予定）。本稿の一部を加筆修正した筆者の仏語発表 «L'idéal sandien et la philosophie de Platon»（仮題）は、初日の午後の部に組み込まれている。（Colloque organisé par le Centre de recherche sur l'Imaginaire de l'Université catholique de Louvain, dans le cadre de l'Institut des Civilisations, Arts et Lettres. Responsable : Damien Zanone, 20–22 juin 2013 à la Faculté de Philosophie, Arts et Lettres de l'Université catholique de Louvain, bâtiment Erasme, place Blaise-Pascal 1, Louvain-la-Neuve, Belgique.）